横浜市小学校社会科研究会

４学年部会

研修会記録

第　７　号

令和6年　　１月　１０日
横浜市小学校教育研究会
会長　　濱田　哲也
横浜市小学校社会科研究会
会長　　加藤　和之
同　学年部長　　本間　宏志

【提案日時】
１２月　６日（水）

【会　場】
横浜市立白幡小学校

提案　　遠藤　恭兵　先生（白幡小）
司会　　藤原　佳澄　先生（新鶴見小）
記録　　田中　大樹　先生（笹野台小）

１　授業内容と単元名
受け継がれる「浦賀の虎踊り」～300年続く伝統の獅子舞～

２　提案者より
〇視点１に迫る手立てとして、出前授業や体験活動を続けて行った。
〇振り返り支援シートの活用している。教師が気付いてほしいことを記載し自分の考えを再構成する活動を２回行った。
※再構成とは→根拠ある資料から自分の意見を記入し、そこからグループの活動などを経て、自分の考えを新たにすること。

視点①　子どもが問いや見通しをもち、主体的に学ぶ単元づくり
〇問題を可視化する思考ツールの活用。「神奈川無形文化財マップ」を思考ツール（Wチャート）で確認し、思考整理することにつながる。
〇材への関心を高めるために、体験活動を行った。出前授業で教材と出会う機会を作り、材を身近に感じてもらえるようにした。

視点②　個を生かし、協働的に学びを深める授業づくり
〇振り返り支援シートを活用する。ロイロノートのテキストを使用して行い、モデルとなる児童の振り返りを共有した。支援を必要とする児童は、自分とモデルの振り返りを比較し、再考したものを記述することで、よりよい振り返りと学習問題への粘り強さを養えるようにした。

３　協議会
＜資料・板書関係＞
〇具体物が資料で表されている。
〇板書を見ることで、流れがわかりやすい。
→児童の安心にもつながると思う。
〇根拠として教室掲示の中から資料を選んで話し合っていた。

〇資料を通して、自分事とするために、前時までの内容を理解している。
〇資料を出す前と出した後では、話している内容は変わらなかったので視点が変わる資料を用いるとよりよい。
〇体験活動や、話を聞くことで自分事としてとらえることができるようになっている。

＜今後の展開＞
〇白幡小のお祭りで、和藤内を活用するという話が生きるのではないか。

＜手立てについて＞
〇意図的な指名をすること、そして関連することで意見の対立が生まれたり、相乗効果があったりした。
〇本気の学習問題にたどり着いた背景があるからこそ、和藤内の保存と継承について、「思い」を中心に話していた。

＜その他＞
〇自分だったらという考えだけでなく、Tさんの思いについて話し合いをしていた。
〇マイナス面がクローズアップされがちで、仕方なく続けていると考えられないか心配。そうではなく、「大好きで続けたいんだ」などの考えを丁寧に抑えていくのが良いと思う。

＜講師の先生より＞　早稲田大学　教育・総合科学学術院　教育学部　小林　宏己先生
子どもたちが時間認識をするのが難しく、当時の人の暮らしなど自分事にすることが難しいことがある。その中で、体験活動等を活用していくことで自分事として有意義な討論ができていた。議論をする際に、主語がTさんなのか、自分なのか、そこがやや混乱しているような状態だったように思う。主語を揃えることで討論することが必要。
「まとめをしたい」気持ちもわかるが、社会科の時間は１時間の中でまとめをする必要がないときもあるので、授業の特性などを踏まえて見極めが必要である。

＜講師の先生より＞　青山学院大学　教育人間科学部　藤原　享先生
自分の思っていることを伝えたり、聞いたりする学級経営が行われていることが活発な討議につながっている。児童と教師がともに授業を作る一体感があったと感じる。
一方的に話したり、暗記したりする社会科ではなく、自分で考えたことを伝えたり、深めたりする経験が大切になる。今回の授業では、子どもが自分の言葉で伝えようとする意欲が見えた。
４年生なりの、議論する力や考え思考する力を育てていくことが必要。
根拠をもって話をするために、資料の準備をされていたことで、児童がそれを活用して意見を話していた。自分たちの住んでいる身近な地域の方々が行っていることを取り上げることや、授業の軸を自分の生活とつながりを考えていくことが必要である。

文責　　佐藤　安世　（北綱島小学校）